

うたごえ運動の出発

— 中央合唱団『うたごえ』の分析を通じて —

河 西 秀 哉

The Start of the Utagoe Movement

KAWANISHI Hideya

要 旨

本稿が明らかにするのは、初期のうたごえ運動の活動実態である。

うたごえ運動は、1948年に関鑑子（せきあきこ）によって、中央合唱団が結成されたことにより始まった。1953年に「第1回日本のうたごえ祭典」が開催され、その後、全国に急速に広まっていく。中央合唱団は共産党系の青年組織である日本共産青年同盟の音楽部門として結成されたことからわかるように、共産党の影響を大きく受けていた。しかし、うたごえ運動は共産党の影響下にあったわけではなく、社会の動向に大きく影響を受け、歌を通して平和を追求する運動を行っていた。

これまで、うたごえ運動の研究はほとんど行われてこなかったが、近年になって急速になされるようになってきた。しかし、一次史料がほとんど検討されていないこと、初期の動向がほとんどわからないことなどの問題が残っている。

そこで本稿は、中央合唱団の機関誌『うたごえ』の分析を通じて、1940年代後半から1950年代初頭にかけてのうたごえ運動の実態の解明を行った。その結果、①みんなで歌うという行為に活動の重点を置いていたこと、②平和を追求するような思想を持ち、そのような歌を歌っていたこと、③ロシア音楽や日本民謡を特にレパートリーとしていたこと、などが明らかとなった。

キーワード：うたごえ運動、社会運動、関鑑子、共産党、民謡

Abstract

This paper will shed light on the activities of the Utageo Movement in its early period.

The Utageo (Singing Chorus) Movement began when Akiko Seki formed the Chuo Choir in 1948. "The First Utageo Festival of Japan" was held in 1953, following which the movement rapidly spread throughout Japan. The group was formed as the musical wing of the Japan Communist Youth Union, which was a Communist-affiliated organization of young people. As this suggests, it was considerably influenced by the Communist Party. However, this does not mean that the Utageo Movement carried out its activities under the influence of the Communist Party. Instead, it was heavily influenced by trends in society and it conducted its pacifist activities through music.

There was hardly any research concerning the Utageo Movement in the past, but in recent years there has been a sudden increase in research. The problem however remains that primary historical sources have been hardly examined and there is little understanding of its development in its early period.

Therefore, this paper conducted an analysis of the Chuo Choir organ *Utagoe* to shed light on the reality of the Utageo Movement's activities from the late 1940s until the early 1950s. The results of this include the following findings: (1) The Utageo Movement's activities were focused on the area of choral singing. (2) The Utageo Movement had pacifist ideals and sang pacifist songs. (3) The Utageo Movement's repertoire was devoted to Russian music and Japanese folk songs in particular.

Key words: the Utageo (Singing Chorus) Movement, social movement, Akiko Seki, Communist Party, folk songs

はじめに

近年、うたごえ運動の研究が盛んである。それらは、おおよそ三点の傾向からなる。第一に、音楽学的な関心から、うたごえ運動全般を検討し、その意味を解明しようとしたものである。その中で、最も網羅的かつ体系的にうたごえ運動を検討し、それを総体として把握したのが長木誠司の研究である¹⁾。それまで、音楽史の中でうたごえ運動が本格的に研究されることはほとんどなかった。その理由として、うたごえ運動の担い手の多くがアマチュアであり、後述するように政治的・社会的背景を有していたことから、職業的音楽家の検討を中心とした音楽史の分野ではなじまなかったことが考えられる。それに対して長木の研究は、戦後音楽史を社会的な背景とともに捉えることを目的としており、その中でうたごえ運動を検討してその意味を考察したものであった。音楽学からは他に、甫出頼之が初期のうたごえ運動の歴史的展開をコンパクトにまとめており²⁾、近年になって敗戦後の日本の音楽史の中でうたごえ運動の重要性が強調され始めている。

第二に、歴史学・思想史の中からうたごえ運動を検討した研究である。こうした研究は、具体的な団体・地域のうたごえ運動を取り上げ、検討対象としている。サークルに集う労働者の意識を解明する一つとして国鉄のうたごえ運動を取り上げた三輪泰史³⁾、1950年代の九州・北海道の炭鉱労働者によるうたごえ運動を取り上げた水溜真由美⁴⁾、1958年の王子製紙争議（北海道・愛知）とうたごえ運動の関係性を論じた岸伸子⁵⁾、「竹田の子守歌」の歌われ方を通して1960年代の京都におけるうたごえ運動の展開過程を解明した武島良成⁶⁾など、史料や聞き取りを駆使した実証的で優れた研究が多い。こうした研究が近年に出てきた背景には、社会運動史の再検討という歴史学の課題がある。従来の社会運動史研究がハードの側面に焦点を当てていたのに対し、近年の社会運動史はその担い手の意識といったソフトの側面に注目されることが多い。そして、社会運動史の中で取り組まれた文化的な活動の一つとしてうたごえ運動が検討され、担い手の意識が解明されるようになったのである⁷⁾。その結果、なぜ人々はうたごえ運動というサークル活動に参加したのか、明らかになりつつある。

第三に、うたごえ運動の中でも特に1950年代後半や昭和30年代を中心的な課題とし、その時代像とともに把握する研究である。門奈由子の研究は、1955年に日本のうたごえ実行委員会が創刊した『うたごえ新聞』を史料として、当該期のうたごえ運動についての解明を試みた⁸⁾。また、昭和30年代の民謡ブームとうたごえ運動の関係性について検討した寺田真由美⁹⁾や輪島裕介¹⁰⁾の研究は、本論で後述するうたごえ運動における日本民謡の位置づけとも通底しており、興味深い。

以上のように、うたごえ運動の研究は近年、急速に進展している¹¹⁾。一方で課題もある。第一に、史料的な問題である。第一のうたごえ運動を総体的に検討した長木や甫出の研究は、後の編纂物や回想を主な史料として用いている。当該期の史料については、うたごえ運動で実際に使用された『青年歌集』を長木が用いた以外はほとんど利用されていない。後世になって書

かれたものではなく、当該期の一次史料にあたって、うたごえ運動とは何かを明らかにする必要があるだろう。第二に、検討の対象が1950年代後半以降に重きを置かれている点である。これは、現在国立国会図書館などに所蔵されて一般的にアクセスできるうたごえ運動の機関紙『うたごえ新聞』が1955年に創刊されたことが大きい。一次史料を使用した研究はこれまで、第二の具体的な団体・地域を取り上げる以外は、『うたごえ新聞』が創刊されたこの時期以後を対象とするしかなかった。つまり、うたごえ運動が出発した時期は、一次史料に基づく研究は未だほとんど手つかずといってよい研究状況にある。

そこで本稿は、うたごえ運動の出発時を、一次史料に基づいて明らかにしていきたい。うたごえ運動の歴史は後述するが、そのスタートは1948年2月10日に青共中央合唱団（後の民主青年団中央合唱団）が創立された時と言われる。初期のうたごえ運動の中心はこの中央合唱団であった。本稿では、その中央合唱団の機関誌であった『うたごえ』を史料として用いる¹²⁾。『うたごえ』は1949年2月に第1号が創刊され、毎月2回発行、現在は1950年11月15日に発行された20号まで確認できる（合併号や演奏会プログラムを兼ねたものもあり）。おおよそA3用紙に表裏印刷され三つ折りにした号が多く、内容は活動の記録・歌われる曲の楽譜・うたごえ運動に関する意見、政治・社会に対するメッセージなどが記されている。紙面でその購読も呼びかけられており、全国のうたごえ運動の担い手に読まれたものと推測される。そこで本稿ではこの『うたごえ』の内容を分析し、1940年代後半から1950年代初頭のうたごえ運動の出発時における状況や思想の解明を行いたい。なお、おそらく『うたごえ』の後継誌の役割を持ったものとして『音楽運動』という雑誌が1952年11月から1954年11月まで発行されていることが現在確認できているが、その検討は別稿を予定している。

1 うたごえ運動の始まり

ここではごく簡単に、うたごえ運動の歴史について見ておきたい。敗戦後、占領軍の指導によって、日本の民主化は急速に進展していく。その中で文化運動も大きな広がりを持っていった。敗戦後に再建された日本共産党は職場における文化サークル組織の支持・強化を促進する方向性を打ち出し、1946年2月3日に日本青年共産同盟（青共）第1回大会を開催している。それと前後して、マルクス主義者や自由主義的知識人も参加した民主主義文化団体が相次いで設立された。1946年2月27日には敗戦後に復興した新日本文学会・日本現代音楽協会（現音）などの民主主義文化団体を結集する形で、22団体3万人を集めた日本民主主義文化連盟（文連）が設立される。文連は「反体制の政治と結合した学問や文化の運動が、ここに展開する」と評価される¹³⁾ような性格を有しつつ、文連各加盟団体は文学・映画・演劇・音楽などの分野別のサークル協議会を組織し、文化人と勤労者双方が協同し相互に学ぶ会う形での文化運動を構築していった¹⁴⁾。各職場における文化サークルの一形態として合唱があり、職場ごとに合唱団が結成されて人々はその中で活動を行っていく。

後にうたごえ運動の指導者となった関鑑子も文連結成に参加し、音楽部門の指導を担当した。関は1946年2月の現音結成にも参加し、作曲家や評論家との交流も深めていた人物である。関鑑子は1899年生まれ、東京音楽学校声楽科を卒業。1926年に築地小劇場の小野宮吉と結

婚後、プロレタリア芸術運動に参画していく。関は、1929年に結成されたプロレタリア音楽家同盟（PM）の中心メンバーとして活躍していた。しかしその後、1930年代の左翼勢力への弾圧の中で次第に活躍の場を失っていった¹⁵⁾。敗戦後、関は「若者たちの打ちくだかれた姿に胸をうたれ」、「打ちひしがれた人びとに音楽をあげようと決心し」て自宅で歌の集いを行っていく¹⁶⁾。また同時期、共産党で文化芸術工作活動を展開していた蔵原惟人の訪問を受け、「いまこそ文化芸術がもともとめられている時期であり、あなた自身を本当に生かせる時だ」と励まされたという¹⁷⁾。それによって、関は積極的に文化活動に参画していくことになる。このように、戦前からプロレタリア音楽家として注目された人物であった関は、敗戦後に文化活動が展開される中で、音楽部門の指導的立場になっていった。

関は1946年5月に再開された敗戦後初の中央メーデーにおいて、メーデー歌「赤旗」「インターナショナル」を指揮する。同年8月30日には現音主催・文連後援の「第1回働く人々への音楽祭」が東京共立講堂で開催され、そこで関は主導的な役割を果たした。またそれをきっかけとして自立楽団協議会を結成している。同年11月19日には文連・NHK・労働組合の最大統一組織であった全日本産業別労働組合会議（産別会議）の共催で新作労働歌委員会が結成され、新作労働歌が公募されて関はその審査の中心にあった。翌1947年のメーデーで、関は入選作となった新しい労働歌「世界をつなげ花の輪に」などの指揮を担当する。ただしこうした活動を通じて関は、労働組合が援助してサークルを作り、音楽の専門家が協力して音楽を教えるというスタイルでは大衆的な音楽活動に繋がらないと感じるようになった¹⁸⁾。民衆のより自発的・自立的な動きによって音楽活動がなされていく必要性を痛感したのである。

同時期、青共でも文化工作の一環としてコーラス隊の結成が構想されるようになる。そして都内各地から青年が集められ、1947年12月に青共中央コーラス隊が結成された。関はコーラス隊への指導の要請を受け、その指導にあたるようになる。コーラス隊は1948年2月10日には青共創立2周年記念集会に出演、団体名を青共中央合唱団と改称して正式に創立に至る。このように中央合唱団は共産党の文化工作の一環として組織され、関は指揮者として関わったのである。これがうたごえ運動のスタートである。しかし関の活動は文連結成・メーデー参加という経過からもわかるように、共産党に限定されたものではなく、当該期の労働者や知識人など、様々な人々にとって大きな広がりとも共有感を持つものであった。

その後7月12日には青共の幹部学校として中央音楽院が設立され、次第に全国各地からも人々が集まるようになった。また、関の発案により「みんなうたう会」が始められ、その後に組織される職場の合唱団やうたごえサークルの基盤となっていった。また、大阪や名古屋などで中央合唱団の演奏会を開催し、大阪では関西合唱団、名古屋では名古屋青年合唱団などが設立されてうたごえ運動が全国的に広がりを見せていく¹⁹⁾。

1949年2月には青共が民主青年団（民青）に改称したことを受けて、名称を民主青年団中央合唱団に変更し、7月30日には創立1周年記念大音楽会が開催された。その後、1951年6月には民青からの独立が決定され、中央合唱団と改称された。これは、1950年頃から民青との関係性が希薄になっていたこと、うたごえ運動を共産党指導の文化運動よりもより幅広い民主運動として拡大していく意識を合唱団が有していたからではないかと推測される²⁰⁾。『うたごえ』

はこの民主青年団中央合唱団時代の機関紙であった。

2 どのような曲が歌われたのか

ではまず、『うたごえ』に掲載されている楽譜を検討し、うたごえ運動ではどのような曲が歌われたのかを見てみたい。表は『うたごえ』に掲載されている楽譜をまとめたものである。20号で71曲（ただし、表24・44番の「青年よ団結せよ」は2回掲載されているので、全部で70曲）が掲載されている。一見してわかるように、「民謡」が20曲と多い。その中で、日本民謡7曲とロシア民謡6曲が多く、ドイツ民謡3曲、アメリカ・スコットランド・ハンガリー・フランス民謡各1曲と続いている。なぜこのように、各国の民謡がうたごえ運動のレパートリーになっているのだろうか。

まずロシア民謡から見てみたい。すでに戦前の日本において、ロシア民謡は民衆の歌のレパートリーとして数多く取り上げられていた。また敗戦後、シベリア抑留者の帰還と抑留されている間にソヴィエト共産党に傾倒した音楽家たちの帰国が、うたごえ運動へのロシア民謡のレパートリー化に寄与した²¹⁾。彼らの社会主義・共産主義への傾倒がロシア音楽へのあこがれやそれを嗜好する傾向へと進むのは自然ではないだろうか。そして、共産党の影響を受けていたうたごえ運動がロシア民謡をレパートリーとするのもまた、自然な傾向と思われる。シベリア抑留から帰国したチェリストの井上頼豊は、うたごえ運動の指導者として積極的にロシア民謡の普及に貢献している。井上によれば、ロシア民謡には「ロシア的な哀愁感と東洋的な要素」²²⁾があり、人々の共感を得たという。彼のようなソヴィエト音楽への傾倒とともに、ソヴィエトからの帰国者たちの集団「楽団カチューシャ」や関鑑子・中央合唱団も積極的に訳詞を行い（表31・34・48・60番など）、ロシア民謡の日本への定着が図られ、うたごえ運動のレパートリーとなっていった。また、ここでロシア民謡と表記されていないソヴィエト時代に作られた歌曲・流行歌も、日本ではロシア民謡と認識されているケースが多く、うたごえ運動の中ではロシア民謡がレパートリーの大きな柱であったことがわかる。

一方の日本民謡は、なぜうたごえ運動で歌われるようになったのだろうか。これはまず、長木が指摘するように共産党の影響がある²³⁾。共産党は1948年3月、自らの文化工作を「日本民族文化の独立のための闘争」と位置づけた。共産党は民族の概念を用いることで、人々に一体性を持たせ、それによって革命へと向かうことを提起していた²⁴⁾。民族をひとつの共同体として意識させるものこそ、民謡であった。民謡は共産党が思考する革命へと人々を参画させるツールとして用いられ、レパートリーとして加えられた。そのためか、次の「八木節」（表2番）のように普通の日本民謡の歌詞とは異なる（歌詞タイトルは「メーデー八木節」と記されている）、政治性を帯びた・風刺を込めた民謡も掲載されている。歌詞のうち1番と6番だけを引用してみよう。

メーデー八木節

一、ああー

俺は百姓コエタゴかつぎ、かつぐ
コエタゴ重くてならぬ

六、ああー

お前きいたか何んにもきかぬ
きかぬはづだよ何んにも云わぬ

表 『うたごえ』 所収の曲リスト(1)

番号	曲名	作詩	作曲	訳詞・編曲など	編成	備考	掲載号
1	バイカル湖のほとり		ロシア民謡	ぬやまひろし(訳詞)、 井上頼豊(編曲)	4部		1号
2	八木節	ぬやまひろし	日本民謡		斉唱	歌詞には「メーデー八木節」と表記	1号
3	ソーラン節	ソ同盟帰還者	日本民謡	民青团北海道 地方委員会文化 部(採譜)	斉唱		1号
4	おおしくすゝめ	タカクラテル	ハラタロウ		斉唱		1号
5	平和擁護の歌	イフレンケル	ヴェビエロイ	ソ同盟帰還者 (訳詞)	2部	中国革命歌	2号
6	保衛黄河	光未然	洗星海	坂井トクゾウ・ テル(訳詞)	輪唱	「黄河大合唱」という7 曲のうちの1曲	2号
7	われら民主青年	希陽	馬可	坂井トクゾウ・ テル(訳詞)	斉唱	中国革命歌	2号
8	義勇軍行進曲	聶耳	聶耳	坂井トクゾウ・ テル(訳詞)、 関鑑子(編詩)	斉唱	中華人民共和国国歌	2号
9	五つの花				斉唱	中国共産党開放区で愛唱 されていた歌	2号
10	小麦色の娘	シベトフ	ノビコフ	関鑑子(訳編)	3部	ドイツ軍と戦うバルチザ ンをたたえる歌	3号
11	野こえ山こえ	エフ・アリモ フ	アトウロフ	中央合唱団 (訳・編詩)	2部	アムール川地域のバルチ ザンをたたえる歌	3号
12	誰が知ろうか	エム・イサコ フスキー	ヴ・サハロフ	中央合唱団 (訳・編詩)	3部	独ソ戦前のコルホーズ若 者を歌った歌	3号
13	誓の石	ア・ザロフ	ベ・モクロウ ソフ	中央合唱団 (訳・編詩)	斉唱	4番までのうち訳詞は1 番のみ	3号
14	ソ同盟国歌	セルゲイ・ミルコフ、 エリ・レギスタン	アヴェ・アレ イ・サンドロフ		2部	日本語・ロシア語併記	3号
15	金は天下のまわりもの		人形劇団ブーク (提供)		斉唱		4号
16	航路	ア・チュールキン	ヴォ・セドイ	関鑑子(訳編)	3部		4号
17	木曽節		日本民謡		斉唱		4号
18	氷滑		ドイツ民謡		斉唱	日本語	5号
19	冬の日	ぬやまひろし	関忠亮		斉唱		5号
20	詩神の子		シューベルト	高橋信夫(訳詞)	斉唱		5号
21	燃えろベチカ		ロシア民謡	緒園凉子 (作詩とあるが訳詞か)、 佐々木幸徳(編曲)	2部		5号
22	みかんばたけ	ぬやまひろし	原太郎		斉唱		5号
23	平和を守れ	木谷健一	種市蔵一		3部	戦後の大学生によく歌わ れた曲	6・7・8 合併号
24	青年よ団結せよ	[P.ゲルマン]	クルチャーニン		斉唱	日本語、学生運動で歌わ れた曲、ブラーク国際青 年祭コンクール入選作	6・7・8 合併号
25	道		ソヴェト歌曲	岡田和夫(訳詞)	4部		6・7・8 合併号
26	カリンカ		[ロシア民謡]		2部	日本語	6・7・8 合併号

表 『うたごえ』 所収の曲リスト(2)

番号	曲名	作詩	作曲	訳詞・編曲など	編成	備考	掲載号
27	灯 (ともしび)		トム・ブランテール		斉唱	ブランテールはソビエトの作曲家、日本語	6・7・8 合併号
28	シベリア大地の歌		エヌ・クリュコフ		2部	映画「シベリア物語」の主題歌、日本語	6・7・8 合併号
29	防人の歌	〔九州地方農民〕	九州地方民謡		斉唱	秀吉の朝鮮出兵時に農民が詠んだもの	6・7・8 合併号
30	人足の歌	舟方一	清宮正光		2部	詩集『我が愛は斗の中から』より	6・7・8 合併号
31	うるわし春の花よ	〔スルコーワ〕	ベ・モクロウソフ	〔劇団カチューシャ訳詞〕	斉唱		9号
32	汝が友		ハンガリー民謡		3部	日本語	9号
33	あわて床屋	〔北原白秋〕	山田耕筈		斉唱		9号
34	風よ歌え	〔レベシェフ・クマチ〕	イドゥナエフスキー	〔劇団カチューシャ訳詞〕	斉唱		10号
35	(新メーデー歌) 晴れた五月の	江森盛弥	関忠亮		斉唱		10号
36	(平和讃歌) 美しい祖国のために	岩上順一	関忠亮		4部	ほとんど斉唱、最後から2小節目が2部、最後の小節目が4部	10号
37	世界をつなげ花の輪に	篠崎正	箕作秋吉		4部		10号
38	たのしくうたえば		ドイツ民謡		斉唱	日本語	11号
39	五月のモスクワ	〔V・レベジェフ・クマチ〕	〔ボクラス兄弟〕		2部	スターリン時代に作詩作曲されたモスクワ賛歌、日本語	11号
40	王様のマーチ		フランス民謡	二條啓輔 (訳詞)	4部		11号
41	ラ・マルセーズ	〔ルージェ・ド・リール〕	〔ルージェ・ド・リール〕		4部	フランス国歌・革命歌、日本語	11号
42	全世界民主青年のうた	〔L.オシャニン〕	〔A.ノヴィコフ〕	〔関鑑子訳詞〕	斉唱	第1回世界青年学生平和友好祭典コンクール作曲部門1位	12号
43	親衛隊のうた		ソビエト青年共産同盟歌	鹿地亘 (作詩とあるが訳詞か)	斉唱	日本語	12号
44	青年よ団結せよ	〔P.ゲルマン〕	クルーチニン		斉唱	日本語	12号
45	若者よ	ぬやまひろし	関忠亮		4部		12号
46	人民抗争歌				斉唱	朝鮮半島歌、楽譜にはハングルカタカナ書き、日本語詩もあり	13号
47	憎しみのるつぼ	〔E.ラージン〕	〔E.ラージン〕	〔鹿地亘訳詞〕	4部	1897年モスクワの牢獄で作曲	13号
48	ぐみの木		〔ロシア民謡〕	〔劇団カチューシャ訳詞〕	2部		13号
49	国際学生連盟の歌	レ・オシアニン	ヴェ・ムラダリ		斉唱	国際学生連盟は1946年8月にプラハで設立、日本語	14号
50	動物園	深尾須磨子	ハイドン	橋本国彦 (編曲)	4部	交響曲第94番「驚愕」より	14号
51	麦畑で	〔ロバート・バーンズ〕	スコットランド民謡		3部	日本語	14号
52	東京急行青年行動隊の歌	〔東京急行青年行動隊〕	関忠亮		4部		14号
53	秩父民謡		日本民謡		斉唱		15号
54	自由の歌		〔ドイツ民謡〕	〔夏目利江訳詞〕	4部		15号
55	狩人の合唱	桑田つねし	ウェーバー		2部	歌劇魔弾の射手第3幕より、日本語	15号

表 『うたごえ』 所収の曲リスト(3)

番号	曲名	作詩	作曲	訳詞・編曲など	編成	備考	掲載号
56	舟のりの唄	[メヂェフィナ]	[ロシア民謡]	[中央合唱団訳詞]	2部		15号
57	きらめく星				4部	日本語	16号
58	たたら節		埼玉民謡		斉唱		16号
59	全世界学生行進曲	[グリヤーナ]	A.ノヴィコフ	関鑑子(訳詞)	斉唱		16号
60	祖国	[R・クマチ]	[ドナエフスキー]	[楽団カチューシャ訳詞]	2部		16号
61	楽し歌声				2部	日本語	17号
62	同志をたゝえる歌		アメリカ労働歌		2部	日本語	17号
63	仕事の歌(若者よ)		ロシア民謡	[津川主一訳詞]	2部		17号
64	夕張娘	ぬやまひろし	大木正夫		斉唱		18号
65	平和の声		西山龍介		2部		18号
66	づいづいづころばし		日本民謡	橋本国彦(編曲)	4部		19号
67	カチューシャの唄	エム・イサコフスキー	エム・フランテル	関鑑子(編訳詞)	2部	ロシア民謡	19号
68	建設人民的華北	駱文莎■	程雲莎葉	サカイ・トクゾー(訳詞)	輪唱	中国共産党軍が北京入場の際に歌った歌	19号
69	懐しのヴァージニア		アメリカ民謡		4部	英語、日本語併記	20号
70	かぞえ唄	佐々木孝丸	関忠亮		4部		20号
71	国の隅々から		ジェルジンスキー	関鑑子(訳詞)	2部	オペラ「静かなるドン」終幕コーラス	20号

作詩・作曲者名などは『うたごえ』に掲載されているとおりに表記した。■は判読不明字。『うたごえ』に掲載されていないが、追記したものは〔 〕を付した追記にあたっては「うたごえサークル『おけら』」のHP (<http://bunbun.boo.jp/index.htm>) が大変参考となった。

前のコエタゴホラどんぶりこ
後のコエタゴホラどんぶりこ
肩にめり込む天ビン棒に
汗がにじめば今日も暮れ行く
おおいさね

首を切るとはセンキヨの時にや
ちっともいわないあの民自党
内閣つくればスイカのように
スパリスパリと首をきりがる
おおいさね²⁵⁾

このように、「八木節」のメロディーに別の詩が付されている。ここで作詩と記されているぬやまひろしは戦前から共産党に入党していた詩人で、敗戦後は党の中央委員を務め、共産党の文化運動をリードした人物である。6番の歌詞は、1949年1月の衆議院総選挙後に発足した民自党の吉田茂内閣の政策を皮肉ったものであった。吉田内閣は経済安定9原則やドッジ・ラインを遂行し、デフレ政策を実行していった。その結果、企業は合理化を迫られて人員整理に向かっていく。それを「八木節」のメロディーに乗せて、「スパリスパリと首をきりがる」と表現したのである。この歌が掲載された同じ号には、「我々の歌声と青春をはばむ職制民同を職場から追放しよう!!」と、共産党系が主流であった産別会議の中で共産党の支配に否定的であった民主化同盟(民同派)を吉田内閣とともに批判する意見が掲載されている。つまり、歌にその時の政治的主張を重ねていたのである²⁶⁾。なお「ソーラン節」(表3番)も「赤旗」という言葉が用いられて共産党を想起させる歌詞が付されており、日本民謡にこうした政治性を帯びた歌詞を付けて歌うことは、うたごえ運動の特徴の一つであった。

ただし、日本民謡はこうした政治的思考だけでレパートリーに加えられたわけではなかった。歌にそれまで親しみのなかった人々を惹きつける手段として、民謡が用いられたと考えられる。中央合唱団の第1期生であった奈良恒子の回想を見てみよう²⁷⁾。奈良は中央合唱団の公演宣伝のために小郡の国鉄の現場を訪ねた。そこは労働者が昼ご飯を食べている食堂で、「男の人ばかりで、わたしがあいさつしてもチラッとこちらを向いただけで、夢中で食事をしているよう」だった。その時、奈良は「そうだ、と思いついたのが民謡です。労働歌や革命歌は知らなくても、民謡なら誰だって聞いたことがある」と考えた。そして奈良は「木曽節」を歌い出す。「唄といっしょに踊りも簡単ですが知っていました」と、振りを付けて「木曽節」を歌ったところ、それまで奈良を見ていなかった労働者たちが注目しだしたという。このように、合唱・うたごえに触れることが少なかった労働者に対し、歌に興味を持ってもらうために奈良は日本民謡を歌ったのである。「木曽節」は小郡の民謡ではないが、人々には親しみを持たれていた。日本民謡がレパートリーに加えられたのは、うたごえにはそれまで興味の無かった初心者が参加しやすい環境を用意する目的があった。

ところで、奈良が振りを付けて歌ったと述べるように、うたごえ運動では日本民謡を振りを付けて歌うことが多かった。図1は『うたごえ』第4号(1949年)に掲載された木曽節の譜面とそこに付された動作の図である。うたごえ運動における民謡は、直立不動で歌われるものではなく、この図1のように身体性を伴ったものであった。それは、民謡がそもそもそのような意味を持ちながら世間で歌われていたからであろう。うたごえ運動において民謡を歌うことは芸術性を追求することではなく、自身に極めて身近な生活の実感などをみんなで共有するためだった。そして、その生活をより意識化するために動作を伴って日本民謡を歌ったと言える。このように、日本民謡を生活に根ざした、明るくたくましい生産の歌としてうたごえ運動では捉え、民衆に密着した労働歌としてレパートリーに加えたのである²⁸⁾。

うたごえ運動の譜面では、五線譜の他に数字や下線などが付されているものもある。これは数字譜である。1はド、2はレ…と続く(0は休符、なお数字は移動ドである。図1の「木曽節」はハ長調のためCがド。図2の「美しい祖国のために」はイ長調のためAがド)。数字に下線の無いものは4分音符、1本線は8分音符、2本線は16分音符になる。数字の横に点が付いているものは付点音符となる。『うたごえ』に掲載された楽譜のほとんどにこの数字と下線が付けられており、五線譜の読めない初心者にもそれらを使いながらメロディーが理解でき、歌が歌えるように工夫がなされていた。

また、編成についても見てみると、明らかに斉唱が多い。これも初心者に向けた曲をうたごえ運動ではレパートリーとしていると考えることができる。つまり、一つのメロディーを全員で合わせて歌うことに主眼が置かれていた。パートを多くして和音を複雑化することでの、初心者の拒否感を和らげようとしていたのである。一方で、合唱のハーモニーを体験させようとする配慮も見られる。図2の「美しい祖国のために」は、曲のほとんどが斉唱で最後になって4和音が登場する。つまり、一つのメロディーをみんなで歌い、最後にハーモニーを体感させる曲の構造となっている。このように、編成で声部が分かれている曲も最初から分かれているわけではなく、途中で声部が分かれる(最後の数小節のことが多い)構造の曲がいくつか見ら

木曾節 (日本民謡)



- (2) あわせな なかのりさん
あわせやりましたやんじやらホイ
たびをそろえてよいよいよい
- (3) 川のな なかのりさん
川のなるせとなんじやらホイ
しかのこえよいよいよい
- (4) きりのな なかのりさん
きりのかゝらぬなんじやらホイ
山はないよいよいよい
- (5) かさにな なかのりさん
かさに木のはがなんじやらホイ
まいかゝる よいよいよい



図(1)「本曾のな」で(イ)右手を肩の高さで廻して前へだし(ロ)左手を肩の高さにあげひちを上に曲げる(ハ)右足を前に出す。以上(イ)(ロ)(ハ)を同時に行う。「あ〜あ〜あ」で前の逆

手首を曲げる「さ〜ん」で右足はその位置で左足を後ろへ引いて逆の姿勢となる。「本曾のおんたけさんは〜」右足はそのまゝで左足を前にだし右手をひちから曲げて上に上げる。つまり図(1)の形を交互に4回4つずみの方向にむいて踊り1週りする 図(3)「なん



じやら」で両手を横にひろげ左足を半歩前に出す 図(4)「ほ〜い」で足をうしろえ手をまわしてうつ 図(5)「なつ」小節の初めの半拍休みの時右足をうしろえひき左手を高くさしあげてその甲をながめる「で」その逆

手を上に挙げ首をもちあげ左足は半歩前に出す 図(7)「さ〜む〜い」で右足をもちあげ上の手を大きくまわして図の如く何かもちあげる様な形をする 図(8)「よいよい」右足を前にだしながら手をうつ最後の「よい」で足をそろえて手をうつ

図1 『うたごえ』第1号より

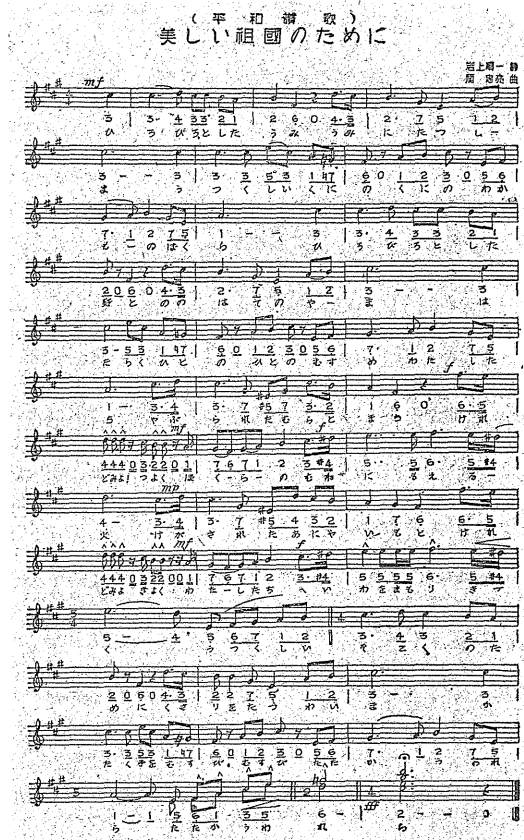


図2 『うたごえ』第10号より

れる。これは、初心者に歌いやすいように、しかもハーモニーの魅力を感じさせるような曲に編曲し、それをうたごえ運動ではレパートリーにしたと見ることができるだろう。

最後に、民謡以外の曲についても触れておきたい。第一に、ソヴィエトや中国などの革命歌が散見されることである（例えば表5・7番など）。こうした歌がレパートリーになっている背景には、後述するように政治性を帯びた意図がうたごえ運動にはあったからであろう。第二に、作曲者の中に図2の「美しい祖国のために」を作曲した関忠亮の名が目立つことである（表19・35・36・45・52・70番）。関忠亮は関鑑子の弟で、うたごえ運動の指導者として活躍していた。うたごえ運動はその後、積極的に新しい曲を創作し歌っていくが、そこにはひとりひとりが新しく共同して「作る」という行為を通じて、結束力を高めて広まっていくという効果が期待されていた²⁹⁾。初期も関忠亮を中心に曲が創作され、歌われていた。

3 うたごえ運動の政治性

中央合唱団は次のような綱領を有しており、その下に活動を行っていた。

- 一、われ^(ママ)合唱団は、長い間の封建制と軍国主義の打破、団結の美しさ、明るい未来の確信を伝えるためにうたう。

一、われわれの合唱団は、卑俗な流行歌を駆逐し、闘いの中から、民族の歌をつくり出す。

一、われわれの合唱団は、青年戦線統一のための歌声を拡大し、職場、農村、学校などのあらゆるところに歌う集団をつくる。

一、われわれの合唱団は、民族の独立と、自由平和、民主人民政府樹立のためにうたう。³⁰⁾

一つ目・四つ目の綱領からは、戦争への反省とともに、中央合唱団が強い政治性を有して活動していたことがうかがえる。中央合唱団は前述のように民青の組織である以上、その主張の中に共産党の影響を受けた政治性・社会性が見られるのは当然であろう。『うたごえ』第2号(1949年)は中華人民共和国成立祝賀特集号として、野坂参三の意見や中国革命歌の楽譜を掲載し、中国における共産党政権の成立を祝した。第3号(1949年)は11月2日に発行されているが、1917年の10月革命を記念する特集号となっている。そこには「日ソ親善世界の平和と安全を守ろう!!」との見出しが掲げられるように、共産主義国やそれに関係する組織に対する親しみを訴える記事が『うたごえ』にはたびたび掲載された。

また1950年頃からは、アメリカなどの西側諸国のみとの講和を模索する吉田茂内閣の政策に対する反発が、『うたごえ』の中にも現れてくる。関鑑子は次のように述べている。

苦しい生活をはねかえす力を、真の幸福を闘いとる熱情を総てそれらにつなげる、日本の独立を真の自由と平和をかちとる為の全面講和の主張を職場で家で街で広場で歌いましょう³¹⁾

関はの中で、共産主義国とも講和条約を結ぶ全面講和論の主張を、うたごえ運動を通して広めることを強調したのである。「日本の独立を真の自由と平和をかちとる」とは、片面講和によってアメリカに従属化(たびたび「植民地化」という言葉で示される)させられてしまうことへの危惧であり、こうした主張は共産党を中心に革新勢力の中で頻繁に展開されていた。

吉田内閣の進める「逆コース」は、うたごえ運動にも大きな影響を与えた。関鑑子ら指導者はレッド・パージの対象者となり、職場においてもうたごえ運動のサークルが「アカ」だとしつづぶされるケースがあった。こうした状況を受け、中央合唱団でも「吾々の歌を祖国戦線強化拡大へ」と主張して、うたごえ運動を通じて「逆コース」への批判と民主化運動を展開していこうという方向性を強めていく³²⁾。

ただし、うたごえ運動のこうした方向性は反政府運動・共産主義浸透のためだけの運動と考えるのではなく、あくまで民主主義を守る運動・平和を求める運動と捉えるべきであろう。『うたごえ』第16号(1950年)では「我々の歌を戦争反対、平和の歌声に!」、第17号(1950年)では「平和、平和、平和を守れ!」とのタイトルが掲げられ、平和問題に関する特集が組まれている³³⁾。『うたごえ』ではこうした「平和」の文言がたびたび見える。関鑑子も「平和の歌を歌」うこと、そして原爆反対の平和投票に署名することなどを『うたごえ』の中で呼びかけた³⁴⁾。このように、うたごえ運動の中で平和を求める動きは大きかった。そのため、うたごえ運動では平和を求める歌を積極的に歌っていくことになる。このような思想は党派性を越えて人々の共感を得ていた。

4 みんなで一緒に歌うこと

職場では、総力戦体制下の中で合唱が盛んに取り上げられた時期があった³⁵⁾。こうした戦時中の経験が、職場におけるサークル活動の中でのうたごえ運動へと展開していく素地になる。前述の中央合唱団の綱領の三つ目では、「職場、農村、学校などのあらゆるところに歌う集団をつくる」ことが定められており、うたごえ運動では当初から中央合唱団の団員が地域の職場などへ赴き、積極的に歌唱指導などを行っていた。

敗戦後の民主化の中で労働運動が盛んになっていくことも、うたごえ運動が急速に広がっていく背景にはあった。1948年4月に起きた第三次東宝争議では、中央合唱団員が全国から集まった「オルグ」（組織を組織・拡大、勧誘する活動家）に新しい歌を教え、そして彼らが全国へ帰っていき、うたごえ運動が広がっていく³⁶⁾。このように、うたごえ運動は頻発する労働運動とそこに集う活動家との関係性を強く持っていた。うたごえ運動で歌われた歌の中には前述のように新しく作曲された労働歌もあり、労働運動や労働者を励ます作用があったことも、労働運動の中でうたごえ運動が広がっていく理由となった。

『うたごえ』の中にも、中央合唱団員が職場や労働運動の中に入っていった経験が多数掲載されている。中央合唱団の団長であった清宮正光は岩波書店合唱団に指導した時のエピソードを『うたごえ』に寄せている。その合唱団には近所の大同印刷の女性労働者たちも来るようになり、うたごえ運動に参加するようになった。残業のために次第に岩波書店へ行くことができなくなった彼女たちは自分たちの工場に歌う会を持ち、その後労働組合を動かして大同印刷労働合唱団が生まれたという。清宮はそれに対して次のように述べる。

彼女達は恐らく日本の置かれている植民地的な状態を知つてはいないかも知れない。然し毎日の辛い残業から理屈抜きで働らく者の団結と闘いの歌を要求しているこの純粋な乙女達の歌声こそ平和への闘いの歌声ではなくてなんであらう³⁷⁾

清宮のこのまとめはやや政治性を帯びすぎているが、大同印刷の女性労働者が職場の仲間どうしで気楽に集い、歌うことによって楽しみを持つことを自主的に行っていた姿を読み取ることも可能であろう。彼女たちは残業という労働のつらさを解消するものとして、うたごえ運動を捉えていたのである。このようにうたごえ運動は、職場のレクリエーション・サークルとしての意味合いを持っていた。関鑑子も次のように述べている。

青年達が、闘う歌、明るい歌によつてどんなに心身が解放され、それによつて毎日の生活がどんなに生き―とかわるか自ら自身の体験による活動だから、今後益々歌声は高まり広がる許りでしょう³⁸⁾

関自身、歌を歌うことによって心身の解放・日々の生活の苦勞の緩和、日常の糧になる作用があり、そのためにうたごえ運動が広がっていると認識していた。みんなで歌うことによって、そうした作用が浸透する意図をうたごえ運動は持っていたのである。

そしてうたごえ運動が職場の人間関係の触媒になることもあった。『うたごえ』第10号（1950年）には保険会社の第一生命の例が紹介されている³⁹⁾。職場は「封建的なしきたりから未だぬけきれず」、青年層の中には「麻雀とお酒を飲む事で一ぱいにな」っていた。そうした状況を

打破したいと考えた人々がうたごえ運動の公演を見た人々などとともに職場で歌う会を開催したところ、「和やかになり、たのしいフン囲気の中で美しいソビエト画報を見、皆で色々な話をし合う事が出来た」という。その後、次第に職場の中でうたごえ運動が広がりを見せていった。このように、うたごえ運動を通して、歌だけではなく職場の人々が集うこと・話し合うことが頻繁に行われるようになり、職場の人間関係が親密になっていく。うたごえ運動に参加した人々の中には、政治性・社会性ではなく、こうした点に魅力を感じていた者も数多くいたと推測される。うたごえ運動にはこのように職場をまとめる作用があった。

おわりに

1948年にスタートしたうたごえ運動は、関鑑子というカリスマ的指導者の存在や、労働運動や職場への指導によって急速に全国に広がっていく。

青共（民青）の組織であったこともあり、共産党の影響を大きく受けた政治性・社会性を有していた。しかし、うたごえ運動は全く共産党のコントロール化にあったわけではなく、政治や社会の動向に大きく刺激を受け、歌を通して平和・民主主義を追求していた。

「逆コース」によって職場・労働運動に対しても、その影響が出始める。それまでの民主化の方向から、労働者の団結を「アカ」と見て批判する風潮が広がっていく。そのような職場環境の中で、うたごえ運動は労働者を結節させる作用を持った。一緒に同じ曲を歌い、集い・話すことで、それぞれの思いを共有し合っていくのである。

その中でうたごえ運動は、音楽の芸術性よりもむしろ一緒に歌うことに重点を置いていた。そして、生活に密接に関わる民謡をレパートリーとして多く取り上げた。こうした姿勢が、全国にうたごえ運動が定着していく背景にあった。

その後中央合唱団は民青から独立し、「日本のうたごえ祭典」を開催し、より本格化し始めることになる。

付記

『うたごえ』の閲覧に関しては、日本のうたごえ全国協議会のみなさま及び富山仁貴氏のご助力を得ました。記して感謝いたします。なお本稿は、神戸女学院大学大学研究所の2012年度研究助成による成果の一部である。

注

- 1) 長木誠司「“運動（ムーヴマン）”としての戦後音楽史1945～」9～14（『レコード芸術』第53巻9号～第54巻2号、2004～2005年、後に長木誠司『戦後の音楽』作品社、2010年に収録）。その他、長木もメンバーである日本戦後音楽史研究会が編集した『日本戦後音楽史 上 戦後から前衛の時代へ』（平凡社、2007年、188～197ページ）にもうたごえ運動に関する言及がある。
- 2) 甫出頼之「うたごえ運動の歴史的展開」（『エリザベト音楽大学研究紀要』22号、2002年）。
- 3) 三輪泰史「紡績労働者の人間関係と社会意識」（『歴史学研究』833号、2007年、後に三輪泰史『日本労働運動史序説』校倉書房、2009年に所収）。
- 4) 水溜真由美「1950年代における炭鉱労働者のうたごえ運動」（『北海道大学文学研究科紀要』126号、

- 2008年)。
- 5) 岸伸子「王子争議をうたごえ運動とともに」(『女性史研究ほっかいどう』第3号、2008年)。
 - 6) 武島良成「『竹田の子守歌』の文脈」(『部落問題研究』203号、2013年)。
 - 7) 私自身も以前、河西秀哉「合唱の“力”」(『ノートル・クリティーク』第3号、2010年)の中で、うたごえ運動に繋がる労働者サークルの中の合唱について触れたことがある。
 - 8) 門奈由子「1950年代後半の『うたごえ運動』」(『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第18号、2012年)。
 - 9) 寺田真由美「うたごえ運動における民謡の意義」(『表現文化研究』第3巻第1号、2003年)。
 - 10) 輪島裕介「三橋美智也とうたごえ運動」(細川周平編『民謡からみた世界音楽』ミネルヴァ書房、2012年)。
 - 11) 他にも、日本近代と「歌うこと」の関係を描いた渡辺裕『歌う国民』(中公新書、2010年)や日本の合唱史を検討した戸ノ下達也・横山琢哉編『日本の合唱史』(青弓社、2011年)の中でもうたごえ運動について触れられている。また、ミーム学(進化論的情報伝達モデルに関する研究)の視点からうたごえ運動を検討した神長英輔「うたごえ運動とは何か」(『新潟国際情報大学情報文学部紀要』15、2012年)などがある。また、戦後日本社会における表現方法としての「歌うこと」に注目した大門正克「戦後日本の暮らしと大衆文化」(国立歴史民俗博物館+安田常雄編『歴博フォーラム 戦後日本の大衆文化』東京堂出版、2012年)もうたごえ運動に言及している。
 - 12) 日本のうたごえ全国協議会所蔵。『うたごえ』という名称については、中央合唱団の団長であった清宮正光によれば、「合唱団の機関紙をつくらうという話しになって、私に編集がまかされました。タイトル『うたごえ』としたのは私の案で、当時『うたごえ』は一般的な呼称になっていない時期ですから、私の仕事の中でいちばん意義のあった仕事だったのかもしれませんが。平仮名にしたのは、当時まで中学も出られなかったような労働者を広く対象にして運動する目的からです」(関鑑子追想集編集委員会『大きな紅ばら』音楽センター、1981年、168ページ)。このように、『うたごえ』という媒体を世に広めようとする意識を発行者は持ち続けていた。
 - 13) 赤澤史朗「戦中・戦後文化論」(朝尾直弘ほか編『岩波講座日本通史 近代4』岩波書店、1995年、318ページ)。
 - 14) 高岡裕之「敗戦直後の文化状況と文化運動」(『年報日本現代史』第2号、1996年、182～186ページ)。
 - 15) 長木前掲書69～71、84～85ページ。
 - 16) 青地晨「関鑑子伝」(『知性 増刊日本のうたごえ』1956年、133ページ)。
 - 17) 関忠亮「大河となる歌ごころを」(井上頼豊編『うたごえよ翼ひろげて』新日本出版社、1978年、179ページ)。
 - 18) 藤本洋「一人の心臓のときめきを万人の鼓動に」(井上前掲書28～29ページ)。
 - 19) 甫出前掲論文69～70ページ。
 - 20) 甫出前掲論文72ページ、長木前掲書96～97ページ。とはいえ長木は、うたごえ運動の指導者に共産党員が居続けたため、共産党的な思考法や価値観、共産主義国からの影響力・交流などはかなり残存していたと指摘する。
 - 21) 長木前掲書95～96ページ。
 - 22) 井上頼豊『新しい合唱読本』(三一書房、1953年、43ページ)。
 - 23) 長木前掲書92～93ページ。
 - 24) こうした共産党の民族概念については、小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』(新曜社、2002年、第5章)などを参照のこと。
 - 25) 『うたごえ』第1号、1949年。
 - 26) 八木節については、その後の『うたごえ』でも第9号(1950年)で中央合唱団第1期生の川路隆示「うけた『八木節』うけぬ『八木節』」、10号(1950年)で「おばさんと八木節」(筆者不明)などの意見がその後も掲載され、繊維局歌う会の小川美津子が「八木節の時は繊維の滞貨、放出、売行不振を諷刺して本当に自分達の物として歌う事が出来た」(「赤だと云つておどす青年部長」『うたごえ』第11号、1950年)と述べるように、うたごえ運動では歌詞を変えながらその後も何度も歌われた歌であった。

- 27) 奈良恒子『うたごえに生きて』（東銀座出版社、2007年、33～36ページ）。
- 28) これは、寺田前掲論文が1960年代の『うたごえ新聞』を検討した結果、民謡をうたごえ運動で歌うことにそうした意義を込めていたことを明らかにしたことと、時期は異なるが通底する思想である（25ページ）。
- 29) 長木前掲書99～101ページ。
- 30) 「平和と独立のために」（『うたごえ』 6・7・8 合併号、1950年）。
- 31) 関鑑子「二周年を迎えて」（『うたごえ』 6・7・8 合併号）。
- 32) 「一切の弾圧をはね返せ 吾々の歌を祖国戦線強化拡大へ」（『うたごえ』 第14号、1950年）。
- 33) 『うたごえ』 第16号、第17号。第16号は7月、第17号は8月に発行されているため、原爆投下日や終戦記念日がある8月に近づくことが、より平和という概念を思い起こさせる契機となったと考えられる。
- 34) 関あき子^(ママ)「平和署名を戦争を憎むすべての人達に」（『うたごえ』 第17号）。
- 35) 戸ノ下達也『音楽を動員せよ』（青弓社、2008年）、高岡裕之「大日本産業報国会と『勤労文化』」（『年報日本現代史』 第7号、2001年）、河西秀哉「総力戦下における合唱」（『神戸女学院大学論集』 第59巻第1号、2012年）など。
- 36) 長木前掲書87ページ。
- 37) 清宮正光「四百七円」（『うたごえ』 6・7・8 合併号）。
- 38) 関前掲「二周年を迎えて」。
- 39) 「“うたごえ”は職場のみんなのものだ」（『うたごえ』 第10号）。

（原稿受理日 2013年3月4日）